

約束一つ

前田美穂



昔から、尾道は大人一人が通れるだけの細い細い道が何本も走る街だったそう
な。そこに住む人々は古くから水を求め
て小路の先々に井戸を掘り、長い間大事
にその水を使っておった。しかしほんの
少しばかり前に山の斜面に町並みが並ぶ
その奥の山に水を湛える堤ができたとか
で水道が使われるようになり、あつとい
う間にほとんどの家々に水道がひかれる
ようになった。これはそんな時代の尾道
の話だそうな。

尾道にある数多の小路のひとつ、御袖
天満宮に行く途中の左の角を曲がった先

に、与吉という若者が住んでおった。与
吉は早くに父と母を亡くし、細い小路の
その奥の、とても小さなみすばらしい家
にたった一人で暮らしておった。

尾道水道に日が昇る前に、与吉の家の
更に奥に続く小路の先の、小さな井戸に
水を汲みに行くのが与吉の日課じゃった。
うねるように続く小路の奥の短い階段の
先にある石造りの小さな井戸は、夏でも
ひんやりと冷たい、その上飲むとほんの
りと甘い味がするような水を豊かに湛え
ておった。その井戸に与吉は毎日毎日両
腕に桶をぶら下げて、水を汲みに通って

おった。井戸に続く道の両側は大きく長い堀がいくつも並んどったが、その内側に建てられた立派な家々ではその家専用の井戸や水道を使っておったから、この小さな井戸を使っているのは自分の家に水道も井戸もない、与吉くらいのもんじゃない。時折少しばかり大きな桶の底が階段を上る途中で石畳の段差にカツンと当たる音を聞きながら、その日も与吉は、夜明け前の薄暗い道を一人黙々と上っておった。

階段を上がって、檜の木のあるお屋敷の角を左に曲がり、緩い坂道を上るとそ

の井戸が見える。与吉はぼんやりと明るくなった空の下で、いつものように井戸に近寄り、ごとつと木蓋を外して井戸の中を覗き込んだ。井戸のずっと下の方で、水面に映った自分の影が、ゆらゆらと揺れているのが見える。持ってきた桶を下ろそうとして、与吉はあつと声をあげた。井戸の中では、ゆらゆらゆらりと揺れる与吉のすぐ横で、小さな黒い影が、おんなじようにゆらゆらゆらりと気持ちよさそうに揺れておった。びっくりした与吉が慌てて顔を上げると、なんと与吉のすぐ後ろに自分の背丈の半分程の小さな子

どもが立っておった。綺麗な黒髪を肩の
辺りで切りそろえ、自分の背丈より少々
大きめのくたりとした紅い着物を着たそ
の子どもは、少し大きめの口をにっとな
日月形に吊り上げて、くりくりとしたど
んぐりまなこを与吉に向けて、嬉しそう
に微笑んだ。驚いた与吉が、一体全体こ
の子どもは誰だろうと口をあんどり開け
て見つめていると、子どもは黒髪を左右
に揺らし、「与吉、与吉」とチリチリと
鈴を転がすように与吉の名を繰り返した。
「お前、誰だ。なんで俺を知っとるん」
与吉が問うと、子どもはまた口を開い

て、楽しそうに与吉に言った。
「知っとるわあ。だっていつつも与吉が
此処にやって来るのを毎日毎日見ていた
んじゃけえの」



「井戸の中？ そんならお前は一体誰だ」
「与吉、与吉。わしはずうっとここでお前
を見ておった。

お前が水を汲みにくる昔の昔のその昔、
井戸がこの場に造られてからずうっとわ
しはここに居た。

こんこんゆらり井戸の水が枯れぬよう、
こんこんゆらり美味なる水が満ちるよう、
祀り祈られ長き日を、わしはこうして
ずっとずうっと井戸の底から見上げて
おった」

「ほんならお前はどの井戸の水神か」

子どもの正体に驚き半分、納得半分で

与吉がもう一度尋ねると、子どもは嬉し
そうに着物の裾をはためかせ、目の前で
くるりくるりと回ってみせた。

「ほんなら水神様が俺の前に現れて、一
体何の用事があるんじや」

与吉が重ねて問うと、子どもはびたり
と立ち止まり、じっと与吉を見詰めて
言った。

「もうこの井戸は長いこと、与吉、お前
しか使わんようになってしまった。

井戸をようけ大事にしてくれるんも、最
早お前唯一人。なあなあ与吉、井戸とわ
しは繋がつとる。井戸は使う人間がいな

か　　「かつたら死んでしまう。わしは祀る人間
がいなかったら死んでしまう。」

わしが死んだら井戸は死ぬ、井戸が死ん
だらわしも死ぬ。

このままではわしは死ぬ。わしが死んだ
ら水は不味くなるけえ、井戸も死ぬんよ。
なあなあ与吉、お前はこの井戸が必要
か？　お前はこの水が必要か？」

　　「謡うように問う水神の、鈴の音の音が
静かに震えた。」

「使う者がいなくなったら井戸は死ぬの
か」

「そうじゃ」

「祈る者がいなくなったらお前は死ぬの
か」

「そうじゃ」

「お前が死んだら井戸は死ぬのか」

「そうじゃ」

「よし、そんなら俺が毎日この井戸を使っ
てやる。毎日この井戸にやってきて、お
前が死なんように祈ってやる。昨日と今
日と同じように、明日も明後日もずっと
ずっと俺が水を汲みにやって来てやる」

「ほんとか？　本当に祈ってくれるか？
ずっと井戸を使ってくれるんか？」

「うん、約束じゃけえ、安心しい。水神

様との約束じゃ、絶対忘れん」

それに俺の家には水道も井戸もない
けえ、何があつてもここに水を貰いにく
るけえの。そう付け足して与吉はもう一
度約束だ、と水神に向かつて言った。

「約束か」

水神が尋ねると、

「約束だ」

と与吉は繰り返した。

その言葉を聞いて目の前の子供はくる
くると踊りながら、

「与吉与吉、約束じゃ約束じゃ。わしが
死んだら井戸は死ぬ。井戸が死んだらわ

しは死ぬ。忘れるなよ忘れるな。約束じゃ

約束じゃ」

そう言いながらにっこりと笑って、ぼ
ちゃん、という水音と同時に与吉の目の
前から姿を消した。

後に残された与吉は、こりゃあ不思議
なこともあるもんじゃ、それにしても井
戸が使えなくなったら俺にとつても一大
事、大事に使わんといけんなあとしみじ
み感じながら昇り始めたお天道さんを見
て慌てて水を汲み始めた。

それから与吉はあの日の約束通り、毎朝自分の家の先にある、小さな井戸に足を運んだ。毎日井戸の水を汲み、毎日水神が死にませんようにと祈った。

そうやって年月を過ごす間に、いつの間にか月日はめまぐるしく過ぎてゆき、いつしか与吉の顔にも随分と皺が増えた。

こつこつと働いたおかげで貧しかった与吉は裕福になり、所帯を持ち、子や孫にも恵まれた。益々与吉の生活は豊かになり、みすばらしかった小さな家も、今では周りのお屋敷に負けないくらい大きな家に建てかわり、きちんと水道の通った

立派な家になった。そうやって忙しなく過ぎてゆく毎日と豊かな暮らしに、段々とその井戸を使うこともなくなり、いつしか水神の事も約束の事も、与吉はすっかり忘れてしまった。

そんなある日の事じゃった。与吉は朝早く、それもお天道さんより早くに目が覚めたので、家の者達を起こさないようにそつと家の外へ出てみた。外はまだ薄暗く、ぼんやりとした明るさじゃった。門をくぐり、家の前の小路に出ると、ひたり、ぴちゃりと何やら不思議な音がする。与吉が訝しげに思っていると、

「与吉、与吉」

と幽かに空気を震わせるような声が与吉の名を呼んだ。

「俺を呼ぶのは誰だ」

と与吉が辺りを見回すと、少し離れた処に与吉の背丈の半分程の、小さな老人が立っていた。体は大きくくの字に曲がっており、しわしわの皮膚を色褪せて元が何色だったか分からぬ程ぼろぼろになった布で覆い、男か女かの区別もつかんような有様だった。小さな体にちよんと乗った小さな頭から垂れているぼさぼさ髪の下、ぐりぐりのまなこ

だけがじっと与吉を見詰めておった。



「お前、誰だ。何で俺を知っとるん」

相手の汚らしい格好に眉を顰め、与吉は言葉を投げつけた。俺の知り合いにお前のような醜いやつはおらんぞ、一体全体何の用だ。与吉が声を荒げている間、その年寄りは何をするわけでもなく、ただ黙ってじっと与吉を見つめていた。そうして暫らく経った後、ほう、と大きく息を吐いて与吉に向かって口を開いた。

「与吉、与吉。」

わしはずっとお前を見とった。わしはお前を忘れなかった。

お前はわしを知らぬかのう。わしの事な

ど忘れたかあ。

あの日交わした約束も、どうに忘れてしまったかあ」

じっと与吉を見つめたまま、錆びた鈴がちりりと鳴る鈍い音そっくりの声でその者は喉を震わせた。そして、一瞬しわしわの顔が更にくしゃくしゃに歪んだかと思つたら、ばしゃん、という音と同時に、ぱっと与吉の前から消えた。与吉はなんだかそら恐ろしくなつて、こわごわと先刻老人が立っていた辺りに近づいてみた。するとそこには雨も降っておらんかったのに両手で作った輪っかくらいの水溜り

ができとつた。なんでこんな処に水溜り
なんぞできたんじゃないと思ひながら与吉
がその先に目をやると、丁度その水溜り
の辺りから小路の奥の方へとずるりと濡
れた何かを引きずつたような跡と、小さ
な水溜りがいくつか点々とできとつた。
与吉がそれを辿ってみると、水の跡は与
吉の家から小路の奥へと進み、その先の
短い階段へと続いていた。階段を上がっ
て、檜の木のゑある屋敷の角を左に曲がり、
緩い坂道を上つた先の、小さな小さな石
造りの井戸の傍で水溜りは消えておつた。
井戸は随分長い間使われていなかったよ

うで、木蓋は腐れてぼろぼろになつてお
り、所々雑草が生えているような、物寂
しい場所になつておつた。

井戸の周囲をぐるりと見渡しながら、
与吉は昔、自分が若い頃にこの場所で交
わした約束を、ようやく思い出してあつ
と叫んだ。

「そうか、あれはあん時の水神様じゃつ
たんか」

慌てて家から桶を引つ張り出し、井戸
の水を汲んでみたが、水は昔のように冷
たくも、甘くもなくなつておつた。井戸
の中を覗いても、もう昔のようにゆうら

りゆらりと水面が揺れることも、与吉の隣に小さな影が現れることもなかった。

その日以来、与吉の家の更に奥に続く小路の先の、小さな井戸は死んでしまった。小路の奥にひっそりと、誰も飲むことのできなくなってしまった水をただ湛えているだけの井戸が、今もそこに残ったとるちゅう話じゃ。

